

汽水域研究会 NEWS LETTER

第15回三重大会について

汽水域研究会2023年（第15回）三重大会のご案内

汽水域研究会2023年（第15回）三重大会は2023年10月28日（土）・29日（日）に開催いたします。本大会は“沿岸域の生態系機能を考える”がテーマです。初日は、バスチャーターにより、伊勢湾の干潟などにおいてエクスカージョンを行います。二日目は三重大学にてシンポジウム「美し国三重の海から沿岸域の生物多様性と生態系機能を理解する」と環境DNA分析を用いた古環境復元に関する講演を開催します。なお、一般発表についてはポスター発表のみとなります。みなさまの奮ってのご参加をお待ちしております。

（事務局長：瀬戸浩二、大会幹事：金相暉）

【開催テーマ】

汽水域・沿岸域の多様な生物と環境の相互作用が生み出す生態系機能

【内容】

エクスカージョン、シンポジウム、招待講演、一般ポスター発表 等

【日時／場所】

2023年10月28日・29日 三重大学生物資源学部（三重県津市）

28日 13-17時：エクスカージョン（松名瀬干潟、三重県総合博物館等）

29日 9-12時：シンポジウム「美し国三重の海から沿岸域の生物多様性と生態系機能を理解する（世話人：川井田 俊, 金 相暉）」

13-14時：一般ポスター発表

14-15時：招待講演「プランクトンに対するDNAメタバーコーディングを用いた古環境推定：宍道湖等における事例」

講師：島根大学エスチュアリー研究センター 仲村康秀博士

【参加申込締切】 10月6日（火） 詳細は[汽水域研究会HP](#)まで

【主催・共催】

主催：汽水域研究会

共催：島根大学エスチュアリー研究センター
三重大学生物資源学部



←大会の詳細
申込方法
こちらをチェック

三重大会のみどころ

本年10月28日から29日にかけて、三重大会を開催いたします。

1日目のプログラムでは、三重の沿岸域の生物多様性を感じることができる巡検をご用意しています。巡検の最初は、伊勢湾西岸の三重県松阪市にある松名瀬干潟の観察です。松名瀬干潟は環境省モニタリングサイト1000にも選定されている自然環境豊かな干潟であり、多様な生物が生息している貴重な場所です。参加者は現地での観察を通じて、この貴重な自然環境の重要性と保全に向けた取り組みを学ぶことができます。また、三重県総合博物館においても、豊かな自然と歴史・文化の紹介を行います。三重県の自然と歴史・文化は県内で一様ではなく、様々な地域に固有の特色がみられます。博物館では、そのような地域独自の自然や歴史・文化に関する展示や解説が行われ、参加者は三重の魅力の一面をより深く理解できるでしょう。

2日目には、「汽水域・沿岸域の多様な生物と環境の相互作用が生み出す生態系機能」というテーマでシンポジウムなどが開催されます。シンポジウム1では、「美し国三重の海から沿岸域の生物多様性と生態系機能を理解する」をテーマにした三重大学の先生方から講演が行われます。また、招待講演では、「プランクトンに対するDNAメタバーコーディングを用いた古環境推定：穴道湖等における事例」が行われ、汽水域の生物・環境に関する貴重な情報を聞くことができます。

三重学会は、自然と環境に関心のある方々にとって貴重な機会となると思います。伊勢湾の生物多様性や松名瀬干潟の自然、そして三重県総合博物館の歴史と文化に触れながら、シンポジウムの講演などで専門的な知識を共有し、新たな発見や交流を楽しんでいただけます。ぜひ、皆さまのご参加をお待ちしております！

(金 相曄・川井田 俊)



松名瀬干潟のアシハラガニに会えるかも！



伊勢みやげセンターで現地産物も見学！

Laguna（汽水域研究）がJ-STAGE掲載誌として採択されました！

2023年8月4日、当研究会誌である「Laguna（汽水域研究）」が、J-STAGE掲載誌として正式に採択されました。ここでいうJ-STAGE（科学技術情報発信・流通総合システム）とは、国立研究開発法人科学技術振興機構（JST）が運営する電子ジャーナルプラットフォームのことです。J-STAGEのホームページによると、「J-STAGEは、日本から発表される科学技術（人文科学・社会科学を含む）情報の迅速な流通と国際情報発信力の強化、オープンアクセスの推進を目指し、学協会や研究機関等における科学技術刊行物の発行を支援しています。現在J-STAGEでは、国内の1,500を超える発行機関が、3,000誌以上のジャーナルや会議録等の刊行物を、低コストかつスピーディーに公開している」そうです。このようなJ-STAGE掲載誌に当研究会誌が採択されたことにより、多くの国内学会誌と同様に、LagunaもJ-STAGEページから検索、ダウンロードできるような雑誌となります。現時点では2024年4月からの運用開始を目指していますが、今まで以上に同雑誌が注目されることは間違いのないでしょう。

そもそも、なぜ「Laguna（汽水域研究）」をJ-STAGE掲載誌にしたかったのか、そのきっかけについて少し説明しておきましょう。実はコロナ禍の2020年に、ある会員からの次のような意見が編集委員会宛に届いたのが発端です。その意見とは、「昨今の論文には、個別識別のためのDOI（Digital Object Identifier）を付与することが一般化されてきています。しかし残念ながら当研究会の会誌には現在、DOIがついていません。もし本研究会の会誌がJ-STAGEに登載できれば、自動的にDOIが付与されるはずであり、LagunaのJ-STAGE掲載を検討してもらえないでしょうか」という内容でした。

そこで編集委員会では、まず約1年をかけてJ-STAGEへの登録とDOI付与のしくみを勉強することになりました。最初は膨大な書類と高そうなハードルに、なかなか申請の見通しが立ちませんでした。しかしそのうちに、確かにJ-SATGEに採択されれば、無償でDOI付与が可能だということは分かってきました。そこで、本格的な申請作業を進めるための特別チームを編集委員会内に設置して、2022年3月にJ-STAGE申請のためのWeb会議を開催しました。特別チームのメンバーとして現役のLaguna編集委員長の作野のほかには、JAMSTEC（海洋研究開発機構）の坂井三郎博士、東京農工大学の園田武博士、島根大学の香月興太博士に加わっていただきました。このWeb会議により、意外と早く、J-STAGE申請書の大枠を完成させることができました。

しかしJ-SATGE掲載誌の申請には、1点だけ大きな問題があることが、このWeb会議で指摘されました。それは、本申請の審査には、直近2巻の雑誌の実績が重視されるという点です。ちょうどタイミングが悪いことに直近である2021年の第28巻はたまたま3編しか掲載論文がなく、その前の2020年の第27巻は7編の掲載論文はあるものの、掲載記事の数が減っているという事実は審査委員に悪印象を与える懸念があったのです。そのような理由もあって、もう1年本申請を遅らせる決断をしました。そして1年後、2022年の第29巻が10編に到達する見通しがついた時点で、2023年度中のJ-SATGEの本申請を決意しました。2022年における同研究会総会での承認を経て、再度半年をかけて、慎重に提出書類をチェック、JST担当者に複数の疑問点をお聞きするなどして2023年6月ようやく本申請にこぎつけました。そして、この度、見事採択されたという経緯です。

思えば、2009年11月に汽水域研究会発足直後、非査読誌であった「Laguna（汽水域研究）」から同じ名前でも査読誌と生まれ変わった当初、年間1編～数編の掲載と雑誌の維持ですら難しい時期が続きました。しかし最近では編集の都合でやや記事が少ない年もありますが、コンスタントに5～10編程度の記事が掲載されるようになってきました。そして、今回のJ-STAGE掲載誌への採択で、ますます同雑誌への投稿が増えるのではないかと期待しております。汽水域研究会では、前身雑誌である「Laguna（汽水域研究）」（第1号～16号、以前は巻ではなく号と呼んでいました）も含め、順次J-STAGE掲載を目指しておりますので、是非このシステムを会員の皆様の汽水域研究に役立ててもらいたいと願うとともに、今後も、多くの記事の投稿をお待ちしております。

（編集幹事：作野裕司）

関連学会のご案内

◆ 第71回日本生態学会大会

会期：2024年3月16日～21日 6日間

形式：オンライン／対面

会場：関内ホール、横浜国立大学ほか

詳細：https://esj-meeting.net/home_ja/

◆ 日本陸水学会第87回大会

会期：2023年10月12日～15日 4日間

形式：現地対面

会場：ホルトホール大分（大分県）

詳細：<https://sites.google.com/view/jslim87/>

◆ 日本地理学会2024年春季学術大会

会期：2024年3月中旬予定

形式：現地対面

会場：青山学院大学

詳細：<https://www.ajg.or.jp/academic/>

エッセイ

エスチュアリー社会学 ～吉野川河口堰問題

吉野川下流部は、中央構造線を軸にして西にずれていく地殻変動の影響を受けて、東西に細長い平野部が発達する。上・中流部の峡谷とは一線を画すように、下流部では河川勾配が緩い沖積平野の広大な平坦な景色が広がる。毎冬、河口域で光を灯して行う伝統的なシラスウナギ漁などは、この地がエスチュアリー環境の豊かな地であることを物語る。

しかし、地形図をみると一目瞭然であるが、この平野域では繰り返される洪水によって、人々の生活はたびたび脅かされてきたことも事実である。実際、江戸時代から吉野川では利水・治水事業が盛んに行われてきた。現在の吉野川を人工的に開削して徳島城へ水を引き込んだことが、元々の川（旧吉野川）の流域での水量低下を招いた。その結果、過度の海水（塩水）遡上が生じ塩害が多発した。これを防ぐため、1752年吉野川にて阿波青石を敷き詰めただけの絶妙な堰を設けて水のコントロールを行った。あれから250年余りの時を経て平成に入った。国は150年に1度の豪雨に対応する名目でこの堰の代わりに可動堰建設を推進しようとした。しかし、住民はこの公共事業に異議を唱えるべく立ち上がった。

2000年1月23日。有権者の55%が住民投票に足を運び、そのうち9割が可動堰に反対した。投票率50%なければ開票しないという厳しい条件をクリアした、公共事業の是非をめぐる初めての住民投票となった。特筆すべきことは、通常の国政選挙よりも投票に足を運んだのが20代の若者たちであったことだった。また当時投票権のない高校生が主体的にボードウォーク活動をしてこの雰囲気の後押しした。一体なぜ多くの人々が熱くなったのか？社会学者の樋口直人教授（早大）は、吉野川に対する思い出、つまり過去の記憶の想起にあるという。「吉野川を渡ると徳島に帰ってきた気がする」、「堤防に花を摘みに行っていた」。可動堰建設を通じて、普段は忘れていた吉野川に対する記憶が表面化した。そして吉野川という「地域の宝」をうけつぐという発想に至ったと分析している。

眉山から見る吉野川の風景は人工的なものである。それが自然か人工かは関係ないということである。

汽水域、エスチュアリーという希少性や脆弱性を知り、伝えるべく私たち会員はそれぞれの分野で日々研究活動をしている。吉野川のように、汽水域の記憶も人の心に残っている。事実、中海や八郎潟の干拓事業、有明海の可動堰建設など、公共事業は人の暮らしを守るのか、壊すのか？という究極の選択の中で私たち汽水域研究会は活動をおこなってきている。

次代に伝えていくものの本質を、同僚樋口教授との立ち話しの中、吉野川が教えてくれた気がしている。

（情報幹事 山田和芳）



反対運動の風景 提供：樋口直人教授

会員数（2023年9月30日）

正会員：79名（-1）、賛助会員：5名（±0）、
学生会員：41名（±0）、計：125名
#カッコ内は2023年3月31日からの増減を示す

編集後記

ニュースレター第26号の編集・発行が情報幹事として最後の仕事となりました。まさにCovid-19とともにすごした4年間でした。（山）

汽水域研究会ニュースレター第26号 2023年9月30日発行 編集・発行：汽水域研究会

〒690-8504 島根県松江市西川津町1060島根大学エスチュアリー研究センター内 汽水域研究会事務局

office.rgbwa@gmail.com 0852-32-6450 (phone&fax)